Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-27

「何心なさ」の行方 ： 英訳の紫上像をもとに

北村, 結花

(Citation)
国際文化学研究 ： 神戸大学国際文化学部紀要,5:1-27

(Issue Date)
1995-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001159

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001159

「何心なさ」の行方——英訳の紫上像をもとに

北村結花

ハードボイルド作家サラ・パレツキーは、一九九四年の来日講演で紫式部にコメントしていた。リップサービスにせよ、ラディカルなフェミニストとして知られるパレツキーが、東洋の古い物語作家に遥かな連帯の一枝を見ていたこと[1]は、本稿の枕に記しておいて差し支えないだろう。近年、フェミニズム文芸評論に焦点のあてられることの多いヴァージニア・ウルフも、幾度かそのエッセイで式部を取り上げている。ウルフは『源氏物語』の小説技法に興味を抱いていた様子だが、同時に表現する女性の問題にも強い関心を寄せていた。一九二九年の「女性と小説」というエッセイでは、「紀元千年頃…非常に長い美しい小説」を書いた女性として紫式部に言及している[2]。

パレツキーやウルフはそれぞれの状況の中での自らの苦闘を重ねつつ、世界最古の女性表現者としての紫式部に関心を示している。そういう関心を呼ぶものが、確かに『源氏物語』にはある。「夕霧」巻の一節——

例① 女ばかり、身をもてなすさまも所せう、あはれなるべきものはなし、物の哀をもをかしきことをも、みしらぬさまにひきいりしづみなれどすれば、なににつけてか、よにふるはえばえしさも、つねなき世のつれづれをもなぐさむべきぞは、おほかたものの心をしらず、いふかひなきものにならひたらんも、おふしたてけんおやも、いとくちをしかるべき物にはあらずや、こころにのみこめて、無言太子とか、ほふしばらのかなしきことにする、むかしのたとひのやうに、あしきことよきことを思ひしりながら、うづもれなんもいふかひなし、わがこころながらも、よき程にはいかでたもつべきぞと、おぼしめぐらすも、今はただ女一の宮の御ためなり。

「言葉を奪われたもの、表現を奪われたものの不満」[3]が強い調子で述べられているが、ここに語られる思いを紫式部その人に重ねる理解は、殊更に言挙げする要もないだろう。

海外の女性たちが紫式部に関心を持っていたことは、『源氏物語』の古典としての大きさを示すものであり、同時に文学表現の普遍性をも思わせるのだが、翻って考えると、彼女たちの読んだ翻訳小説としての *The Tale of Genji* と、私たちが手に取る古典文学としての『源氏物語』とは、果たして同じものなのかという疑問が湧いてくる。もともと文学作品とは流動的なもので、原作を絶対視するつもりはないが、翻訳が作品のひとつの形であるならば、むしろそれ故にこそ、原作と翻訳との差異に着目すべきであり、比較対照は作品そのものの振り幅を確認する作業になるだろう[4]。

例①は紫式部の女性論であると同時に、物語世界においては紫上の思いでもある。かつて「若紫」巻で春霞のもと、祖母の尼君が静かに勤行している部屋に勢いよく駆けてきた少女、静と動の対照の中に生き生きとした明るさをふりまき、「いみじうおひさきみえて、うつくしげなるかたち」と予言された彼女の、その「おひさき」の果てに、明らかにされる心のうちである。犬君が雀を逃がしたと言ってべそをかいていた女の子は、三十年後、亡くなるほぼ一年前、こうした心境に至る。英訳では紫式部も紫上もともに Lady Murasaki だが、そこに混乱があるわけではない。ただ、紫上と Lady Murasaki との間には、やはり若干の、しかし注目すべき振り幅がある。本稿は、その点に留意しつつ、紫上の変貌をたどってみたい。なお、取り上げる英訳は、完訳であることと普及度を考慮し、ウェイリー訳とサイデンステッカー訳の二つに絞る。

（一）

十歳の春、北山で源氏と出逢った紫上は、半年後、祖母を亡くして源氏に引き取られ、源氏とともに二条院で暮らすようになる。

例②　「いできみもかい給へ」とあれば、「まだようはかかず」とてみあげたまへるが、なにごころなくうつくしくしげなれば、うちほほゑみて、　（若紫）

W　she answered, looking up at him with a witchery so wholly unconscious that he laughed.

S　She looked up at him, so completely without affectation that he had to smile.

（W＝ウェイリー訳、S＝サイデンステッカー訳。以下同じ）。

手習いを始めるが、「まだうまく書けないの」といって自分を一心に見つめる紫上に、源氏はつい微笑んでしまう。ほとんど拉致されるように二条院へつれてこられた紫上だが、源氏をすっかり信頼し、元来の天真爛漫な性質を自由に表現する。紫上は自分が「むらさきのゆかり」であるがゆえに源氏に引き取られたこと、源氏と他の女性たちの関係など知る由もない。幼いものにのみ許された無知の賜ともいえる紫上の信頼と自由のさまを、語り手は「なにごころなく」と表現し、この後も繰り返し語る。例を挙げる。

例③　めのとの「さればこそ、かうよづかぬ御ほどにてなん」とて、おしよせたてまつりたれば、なに心もなくゐたまへるに、　（若紫）

W　She stood listlessly by his side,...

S　she knelt obediently just inside the blinds.

例④　なにごころなくうちゑみなどしてゐ給へるが、　（若紫）

W　she was laughing and playing, with her all woes forgotten....

S　she smiled, innocently and unprospectingly....

例⑤　なに心もなくてものし給ふさま、　（末摘花）

W　the unstudied grace and ease of her movements charmed and delighted him.

S　She was delightful, at an artless play...

「何心なく」は現代日本語では「無心に、無邪気に、何気なく」と訳されることが多く、英訳にも unconscious や innocently といった表現が見られる。しかし「何心なく」の訳としてひとつの傾向とするほどではなく、両訳とも各事例に添って臨機応変に対応していると思われる。

「何心なく」振舞う紫上も次第に成長していく。そうした紫上を語り手はときに「女君」と呼んだかと思うと、またすぐに「姫君」あるいは「若君」と呼ぶ。少女が次第に大人の女性へと変貌する、微妙に不安定な時期を紫上は通過しようとしているのである（原文では紫上の呼称は物語の進行につれ変化するが、英訳はいずれもほぼ一貫して Murasaki あるいは Lady Murasaki であり、このニュアンスは伝わらない）(5)。

そして「葵」巻で源氏と新枕を交わす。それは「何心なさ」との訣別の日でもあった。

例⑥　をとこ君はとくおき給ひて、女君はさらにおき給はぬあしたなり。人人「いかなればかくおはしますらん、御こころのれいならずおぼさるるにや」と、みたてまつりなげくに、きみはわたり給ふとて、御硯の箱を、み帳のうちにさしいれておはしにけり。人まにからうじてかしらもたげ給へるに、ひきむすびたる文、御枕のもとにあり。なに心もなくひきあけてみ給へば、

「あやなくも隔けるかなよをかさね
さすがになれし中の衣を」

とかかきすさび給へるやうなり。かかる御心おはすらんとは、かけてもおぼしよらざりしかば、などてかう心うかりける御心を、うらなくたのもしき物に思ひきこえんけんと、あさましうおぼさる。

それまで父とも兄とも思い、信頼し慕ってきた源氏の突然の振舞いに紫上はひどくショックを受ける（紫上十四歳）。源氏は朝早くに東の対へ行ってしまうが、その時硯の箱を御帳台の中に差し入れていく。人のいない時にやっと頭を上げてみると、結び文がある。それを「なに心もなく」開いてみる。英訳を挙げる。

W Seeing that she was alone Murasaki slowly raised her head. There by her pillow was the writing-box and tied to it with ribbon, a slender note. Listlessly she detached the note and unfolding it read the hastily scribbled poem: 'Too long have we deferred this new emprise, who night by night till now have lain but with a shift between.'

That *this* was what Genji had so long been wanting came to her as a complete surprise and she could not think why he should regard the unpleasant thing that had happened last night as in some way the beginning of a new and more intimate friendship between them.

S At length, when no one else was near, she raised herself from her pillow and saw beside it a tightly folded bit of paper. Listlessly she opened it. There was only verse, in a casual hand:

"Many have been the nights we have spent together
Purposelessly, these coverlets between us."

She had not dreamed he had anything of the sort on his mind. What a fool she had been, to repose her whole confi-

dence in so gross and unscrupulous a man.

共に listlessly という語があてられている。あまりのショックに力も失せ果ててしまった紫上が傍に置かれていた結び文をもの憂そうに引き開けてみるという描写である。確かに、紫上は驚愕のあまり「からうじて」頭をもたげてみる力しかない。listlessly という語は、この場の一面を的確に描き出している。しかし「何心なく」は、ここで初めて使われた言葉ではない。とすれば、ここでの「なに心もなく」もまた、これまで紫上の幼さを描くのに繰り返されてきたイメージの記憶を引きずっているはずである。そしてそうであるならば、「なに心もなく」の「心」は源氏の「かかる御心」の「心」とも通じるもの、あるいは通じなくなったものと考えるべきであろう。これまで心などというものを考えることなく、自分の世界が源氏という人間の中にまで連続していると感じていた紫上の心は、ここでその連続性を断ち切られるのである。

「何心なく」とはまったくの無心、無邪気、つまり「心の無」のさまである。これまで紫上は「何心なく」生きてきた、つまり、人間の心に無自覚であった。それが、源氏に「かかる御心おはすらん」ことを知る。ノーマ・フィールドは「何心なく」を un-self-conscious と解釈している(6)が、紫上はここで「心」――self（自我）――に目覚めたということもできよう。が、それは同時に「『源氏物語』のヒロインの楽園失墜である。この紫の上の「心」は「憂き」という言葉を介して、頼みとすべき男性のじつは頼みがいのない「心」と相対しなくてはならな」(7)くなる。

英訳は「何心なく」を各事例で訳し分けることで、場面状況の一面を的確に描き出しているが、紫上の感情の総体としての「心」の意を脱落させてしまった。新枕での紫上の「心」の誕生は、listlessly では表現しきれない厚みを有しているのである。

この後、源氏の須磨流謫、明石の御方や朝顔の斎院と源氏との関係などに、紫上はさまざまに思い乱れる。とはいえ

「藤裏葉」巻までのいわゆる第一部においては、紫上は源氏の一の人として、六条院の春を謳歌することができた。紫上の真の思いは「若菜上」巻での女三の宮降嫁に始まる。

（二）

「若菜上」巻冒頭、光源氏と女三の宮との結婚話が持ち上がる。時に源氏三九歳、紫上三十一歳、女三の宮は十三、四歳である。先の帝朱雀院たっての要請であり、また「むらさきのゆかり」として女三の宮に心惹かれた源氏は、最終的に承諾する。紫上はそのことを噂で耳にする。

例⑦　むらさきのうへも、かかる御さだめなど、かねてものきき給ひけれど、さしもあらじ、前斎院をもねんごろに聞え給ひしやうなりしかど、わざとしもおぼしとげずなりにしをなどおぼして、さることやあるともとひ聞へ給はず、なにこころもなくておはするに、いとほしく…　（若紫上）

W　Murasaki had already heard some rumour of Suzaku's intention. Her first feeling was one of alarm. But then she reminded herself of all the groundless and unnecessary misery she had suffered on finding that Genji was still visiting Princess Asagao. So determined was she not to attach undue importance to the affair that on his return she refrained even from asking him whether the subject had been discussed.

S　Murasaki had heard vague rumors, but she had told herself that it could not be. Genji had once been very serious about the high priestess of Ise, it seemed, but in the end he had held himself back. She had not worried a great deal, and asked no questions.

新枕以降、「何心なく」とは語られなくなっていた紫上に再び、「なにこころもなくて」という表現が当てられている。女

三の宮降嫁という人生最大の危機への紫上の最初の反応もまた「何心なさ」であった。文章に即して見ていくと、紫上は「まさかそんなことはあるまい」とまず噂を否定する。「朝顔の斎院の時も、結局は何ともなかったのだから」と。「朝顔」巻での朝顔の斎院の登場に紫上は「人知れず思ひ嘆」いた。しかしあの時、何もなく終わっただけに一層源氏を信頼するようになった。「そんなお話があるのですか」と源氏を問い詰めることも考えない。「なにこころもなく」源氏を信頼しきっているのである。

これに対し、ウェイリー訳のMurasakiはまず驚く。将来への不安を感じて怯えるのである（alarm）。しかし余計な心配はすまいと決め、朱雀院のもとから帰った源氏に、降嫁の問題が話し合われたのかどうかも尋ねない。ここは原文の意とやや異なる。原文は朱雀院のもとから戻った源氏に対してではなく、前もって——朱雀院を訪れる前に——問うことさえなかった、という意味である。源氏が朱雀院のもとを訪れたら、女三の宮降嫁の話は決定的なものとなりかねない。予め源氏に問い、自らの意志を伝えることで、あるいは降嫁を阻止できるかもしれない。原文の紫上はそうした手を打っておく必要さえ感じなかった、それほどまでに源氏を信頼していた、と解釈できよう。これを失雀院のもとから帰邸した夜とすると、Murasakiは不安を抱きながらも、自らその不安を解消しようとはせず、事実を確かめる勇気さえ持てない、ただひたすら待つ女性となる。「なにこころもなくておはする」に該当する箇所がウェイリー訳には見当らない。ウェイリー訳のMurasakiは「何心なく」すごすことなど到底できないのである。

一方、サイデンステッカー訳のMurasakiはまず、そんなことはありえないと自らに言い聞かせる。そして朝顔の斎院の経緯を思い出し、さして心配はしない。原文の紫上には噂の段階で悩みはない。もし女三の宮降嫁の話が実際、源氏に打診されているとしても、源氏が承諾するはずがないと考えていると解釈できよう。これに対し、サイデンステッカー訳のMurasakiには源氏への疑いはある（なければ、心配する必要はない）。しかし源氏にわざわざ尋ねるほどの不安では

なかった。過去の経緯から考えて、大丈夫であろうと判断しているのである。原文の「なにこころもなくておはする」紫上に信頼という言葉を当てはめるとすれば、サイデンステッカー訳の「さしたる心配もしなかった」Murasaki には自信という言葉がふさわしい。原文の紫上にも「われよりかみの人やはあるべき」という誇りと自信はある。しかしこの場面での紫上の行動を支配したのはやはり、「何心なさ」――源氏への絶対的信頼である。これに対しサイデンステッカー訳の Murasaki には、十歳の時から源氏と共に生きてきた過去に裏打ちされた余裕を見ることができる。

紫上の源氏に対する絶対的信頼――源氏自身、充分に承知しているだけに、その「何心なさ」が「いとほしく」、源氏はその夜、話を切り出すことができない。翌日、ようやく伝えるが、紫上の返事は「いとつれなく」、女三の宮に同情的でさえあった。とはいえ、心中穏やかであるはずはなく、さまざまに「思ひつづけ」るものの、表向きはごくおだやかに過ごしていく。そして翌年の二月半ば、女三の宮が六条院に迎え入れられる。結婚して三日間、花婿は必ず花嫁のもとに通わなくてはならない。「たいのうへ（紫上）もことにふれて、ただにもおぼされぬ世の有さま」であり(8)、紫上の物思いは休まる時がない。

このあたりの紫上像を英訳に探ろう。まずウェイリー訳。女三の宮降嫁前後には紫上の心内が鏤められている。百字を超えるほどのまとまりのあるものが多いが、これらの心内語にウェイリー訳はさらに加筆する。加筆部分だけ引用する。

例⑧「心のうちにも、かく空よりいできたるやうなることにてしひとわらへならんことを、したには思ひつづけ給えど、」の末尾に加筆。

W And now, though as yet all was well, there came back to her again and again the thought that perhaps the dreaded turning-point had come. His confidence, his devotion, the whole sovereignty in his affections that had been so long her

pride, would begin to slip away from her....

例⑨　「げにかかるにつけても、～なまはしたなくおぼさるれど」の冒頭に加筆

W　Murasaki had naturally not been slow to realize — what Genji had not hitherto definitely disclosed — that Nyosan had come as a bride. The discovery came as a cruel blow....

「決定的な時が来た」というような心理描写の繰り返しから、女三の宮降嫁に立ち直れないほどの衝撃を受け、悶々と思い悩む Murasaki 像が浮上してくる。原文の紫上も「思ひさだむべき世の有さまにもあらざりければ、今より後もうしろめた」いことだと、将来への不安を感じてはいるが、ウェイリー訳は加筆により、その不安が一層、強調されているのである。

また、紫上のもとには源氏に縁ある他の女性たちから消息がある。

例⑩　こと御かたがたよりも、「いかにおぼすらん。もとより思ひみなれたる人人は、なかなかこころやすきを」などおもむけつつきこえ給ふもあるを、かくおしはかる人こそなかなかくるしけれ、世の中もいとつねなきものを、などてかさのみ思ひなやまんなどおぼす。（若菜上）

同情とも皮肉ともつかない手紙に、紫上はわずらわしさを感じずにはいられない。しかし紫上は、彼女たちのように男女の仲の不確かさに拘泥するのは愚かなことと思う。ここには「自分の不幸を正視し、冷静に受け止めようとする」(9)紫上の前向きの姿勢を見ることができる。

W　Meanwhile speculation was rife among the other ladies of the household as to how this new development would affect Murasaki's position; and for the first time they felt a certain satisfaction in their poor estate, which, humdrum though it was, could never land them in one of these humiliating predicaments.... To each of them separately it occurred that it

would be kind to call upon Murasaki, and they arrived in rapid succession, thus bringing home to her in the most painful fashion the fact that she had become an object of sympathy.

S Inquiries came from the ladies in the other quarters, some of them suggesting that they who had long ago given up their ambitions might be the more fortunate ones. Murasaki sighed. They meant to be kind, of course, but they were not making things easier. Well, there was no use in tormenting herself over things she could not change, and the inconstancy of the other sex was among them.

ウェイリー訳の改変は興味深い。紫上の心情は一切、削除され、他の女性たちの悪意が描かれている。彼女たちは「新たな事態はMurasakiにどう影響しているのだろう」と思い、「日の目を見ずに生きてきたけれど、あんな屈辱的な状況に立たされたりはしなかったわ」と初めて満足感を味わう。そして「これも親切よ」と、Murasakiのもとを訪ねていく。当時の風習からすればやや無理のある設定だが、自ら訪問して、Murasakiの現在の心境を直に聞き出そうとしたのであろう。その結果、ウェイリー訳のMurasakiは、「もっとも痛ましい方法で、自分が同情の的になっていることをはっきりと認識させられてしまう」のである。

サイデンステッカー訳は原文にほぼ沿った内容である。途中に"She sighed."とある。原文にはないが、やや長めの文に囲まれて配置されたこの短文は、紫上の吐息をリアルに浮かび上がらせる秀逸な加筆であろう。

サイデンステッカー訳では、紫上が女房たちに語る台詞にも目を向けたい。女房たちが女三の宮降嫁のことをあれこれ言い交すのを制して、紫上は自分が女三の宮を歓迎しているのだと言う。その際、サイデンステッカー訳のMurasakiは、"I somehow hope that we will be the best of friends. Prehaps it is because they say that she is still a mere child." と語る。原文では半年後、女三の宮に紫上が直接、対面して、その幼さを知るのであり、ここではまだ女三の宮の詳細はわからな

い。原文の紫上は「童ごころのうせぬにや」若い姫君と親しくなりたいと語る、即ち紫上自身の童心が抜け切らないから、親しくなりたいというのである。サイデンステッカー訳の場合、親しくなりたい理由はMurasakiの童心ではなく、女三の宮の幼さにある。'a mere child'という言葉は実年齢の若さとともに、精神年齢の幼稚さをも示唆している。ほんの子供であればくみしやすし、と判断するMurasakiがそこから透けてこよう。童心にかえって女三の宮と遊びたいと語り、女房たちに余裕を見せようと努める原文の紫上とは異なり、サイデンステッカー訳のMurasakiには実際に余裕綽々といった感さえもないではない。

その夜、眠れぬままに、紫上は思いをめぐらす。

例⑪　かのすまの御別のをりをおぼしいづれば、今はとかけはなれ給ひても、ただおなじ世のうちにきき奉らましかばと、わが身までのことはうちおき、あたらしくかなしかりし有さまぞかし。さてそのまぎれに、われも人もいのちたへずなりなましかば、いふかひある世かはとおぼしなほす。（若菜上）

紫上は十四、五年前の源氏の須磨流謫の日々を振り返る。『岷江入楚』には「かやうの時の事まて覚し出てなくさめ給へるこゝろも、けにたゝならぬ御心中なるへし」とあるが(10)、紫上は自分を慰めているだけではなかろう。源氏の無事だけを願っていた日々を思い出し、「もしあの時二人とも死んでしまっていたら、その後の源氏との幸せな日々は送れなかっただろう。生きてきた意味はあったのだ」と「おぼしなおす」――気を取り直すのである。例⑩にも明瞭であるが、紫上は現実の分析能力に長けている。感情に流されて、正確な状況把握のできない人間ではない。客観的判断能力と明朗闊達な性質を備えた紫上は、自分の不幸を客観的に分析した上で、さらにその不幸と葛藤し、人生を生き抜こうとするのである。

W　This reminded her of the days when he was at Suma.　She found herself, strangely enough, wishing that he were

now equally far away. Simply to know that he was alive — that was all she asked; and she afflicted herself afresh by imagining him at the ends of the earth, while she remained alone in the Capital. To vary this, she imagined her own death, rapidly followed by his. Here she checked herself. A pretty pass things had come to when she had to conjure up such visions in order to allay the torment of reality!

S She thought of the years of his exile. She had feared that they would not meet again, but the agony of waiting for word that he was still alive was itself a sort of distraction from the sorrow and longing. She sought to comfort herself now with the thought that those confused days could so easily have meant the end of everything.

サイデンステッカー訳は、やや簡略化された感はあるものの、既ね原文の意に添った訳となっているが、ウェイリー訳のMurasakiの思考には堂堂巡りの感がある。彼女は現在の苦悶を紛らわせようと、今まさに源氏が遥かかなたの地にいたらいいのにと想像する。が、そのうち源氏と自らの死さえも思い浮かべてしまう。現実から目をそむけようと過去を思い出そうとすると、逆にやっかいな事まで出てくるので、思わず思い出すのをやめてしまうという風である。先に引用した『岷江入楚』のコメントは、ウェイリー訳のMurasakiにより適切であろう。ウェイリー訳のMurasakiは、自らを追い詰めかねない非生産的思考に振り回された上、他の女性たちの悪意に傷つけられ、悶々とした懊悩の日々を過ごしていくのである。

これまで紫上と源氏は「かたみに隔て聞え給ふこと」などなかった。それが「姫君の御ことの後は、何事もいとすぎぬるかたのやうにはあらず、すこしへだつる心」がおきて、紫上は自らの思いを源氏に語らなくなる。第二部は第一部に比べ、心内語が増加している[11]。紫上の人知れぬ物思いもこれ以降途絶えることがない。

（三）

このち物語は、明石の女御の一の宮出産、六条院での蹴鞠、柏木の女三の宮垣間見を語り、「若菜下」巻へと移る。御代変わりの後、明石の君や女三の宮がそれぞれ新東宮の実の祖母あるいは新帝の妹として、ますます揺るぎない地位を確立させていくのに対し、紫上は我が身のあやうさを感じずにはいられない。女三の宮の幼稚さに失望した源氏の紫上への愛情は増すばかりであるが、朱雀院や新帝への配慮から、源氏が女三の宮のもとへ通う度合いは紫上のそれとほぼ等しくなっていく。源氏の愛のあるうちに出家したいと願うが、源氏は断固として紫上の出家を許可しない。二度の出家願いを拒絶されたのち、紫上は明石の女御の産んだ女一の宮を引き取り、源氏のいない夜のつれづれを慰めるようになる。

翌春、六条院で女楽が催され、その翌日、紫上は源氏と語らう。源氏は自分の生涯は栄華と憂愁を共に極め尽くすものであったと述懐したのち、紫上に「君の御身には、かのひとふしの別（源氏の須磨流謫）より、あなたこなた物思とて、心みだり給ふばかりのことあらじとなんおもふ…そのかたは、人にすぐれたりけるすくせとはおぼししるや」と問う。女三の宮降嫁から七年、紫上は多くの物思いを胸に秘め、語らずにきた。しかしここで彼女の心がちらりと姿を見せる。

例⑫　「のたまふやうに、物はかなき身には、すぎにたるよそのおぼえはあらめど、心にたへぬ物なげかしさのみうちそふや、さはみづからの祈なりける」とて、のこりおほげなるけはひはづかしげなり。（若紫下）

W　'I cannot explain it,' she said. 'I know that to any outside person I must appear the happiest of women — fortunate indeed far above my deserts. But inwardly I am wretched .... every day ....' She felt it would take a long time to explain, and had not the courage.

S "You are right, of course. I do not much matter, and it must seem to most people that I have been more fortunate than I deserve. And that my unhappiness should sometimes have seemed almost much for me — perhaps that is the prayer that has sustained me." She seemed to be debating whether to go on. He thought her splendid.

いささか独り善がりな源氏の言葉に紫上は表立って反論しない。他の女性たちと違って、一切源氏にかかりきりの「物はかなき身」に返す言葉はないのである。しかし「確かにおっしゃるとおりですわ」としながらも、「わが心ひとつに収めきれない辛い思いが、かえって自分を支えてくれているのです」という自らの真意を語らずにはいられない。

「祈」の解釈がポイントとなろう。文字通り信仰や経文ととる説もあるが、「自分を生かしてくれる原動力」、「生へのささえ」くらいの意と取りたい(12)。この七年間、紫上は苦悩とともに生きてきた。そうした「苦悩や憂愁が、身に添うて、それが〈気の張り〉になった」(13)のである。ここには苦悩さえも自らのエネルギーに変えて、生きていこうとする紫上の強靱な生命力を見ることができよう。

ウェイリー訳には「さはみづからの祈なりける」にあたる箇所がない。「心のなかでは私はみじめなのです——いつの日も…」という文が取って代わっている。台詞に続いて、「彼女は説明するには長い時間かかるだろうと感じた。そしてその勇気もなかった。」とあるが、ウェイリー訳のMurasakiにはまさに「勇気」が欠落している。苦悩を生への意志に変えていこうとする原文の紫上の強靱な精神力とは逆に、女三の宮降嫁以降、苦悩に翻弄され続け、精も根も尽き果てた感のMurasakiが描かれている。

サイデンステッカー訳は脚注に"The remark has been interpreted in several ways. Perhaps the most interesting interpretation takes it to be ironical."とある。「あなたは確かに無類の憂悶を経験したけれど、代償として現世での最高の栄誉に恵まれたではありませんか。それにひきかえ、身に抱えきれないほどの不幸が私に何を与えてくれたというのです。私

は物思いゆえに生きているようなものですわ」という程の皮肉であろうか。サイデンステッカー訳のMurasakiには、まだ皮肉をいうだけの心のゆとりがあるのかもしれない。

原文の紫上は「はかなき御すさびごと」には皮肉もいうが、深刻な問題に対し皮肉で答えることはない。ここも人知れぬ物思いに耐えかね、思わず本心をちらりと覗かせてしまったのであり、原文の紫上にはサイデンステッカー訳のMurasakiのような心のゆとりはない。しかし、「のこりおほげなるけはひはづかしげなり」――最後まで言い尽さない紫上には、傍目にも気がひけるほど凛然とした美しさがあった。いったん、恨みつらみを源氏にぶつけると、自分を抑えられなくなる。ここで踏み止まることで、自分の誇りを守ったと考えられよう。サイデンステッカー訳にも「Murasakiは話を続けるかどうか思案していた。源氏は彼女をすばらしいと感じた」とある。サイデンステッカー訳の源氏はどういうMurasakiをすばらしいと思ったのか。簡潔な表現からはいまひとつ明確に読み取ることができない。

「さはみずからの祈なりける」という言葉に続けて紫上は三たび出家を願うが、源氏はどうしても承知しない。その夜源氏は女三の宮のもとへ泊りにいく。女房たちに物語を読ませながら、紫上は物語では浮気な男も最後にはひとりの女に落ち着くものなのに、そうはならなかった自分の人生を振り返り、「人の忍びがたくあかぬことにする物おもひはなれぬ身にてややみなんとすらん。あぢきなくもあるかな」と、物思いから逃れられない自分の運命を情けなく思う。

その夜更け、紫上は発病する。

このののち紫上が健康を取り戻すことはない。亡くなるまでの四年間、紫上の身にはさしたる出来事も起こらないが、物語は「若菜下」から、「柏木」、「横笛」、「鈴虫」と女三の宮と柏木の関係とその後日談を描いて、「夕霧」巻へと進む。

夕霧は親友柏木の遺言もあり、未亡人落葉の宮への心配りを欠かさなかったが、やがて結婚を迫るようになる。落葉の宮は尼になる決意でいたが、夕霧の強引な行動に世間は宮も結婚を承諾したものと受けとめた。落葉の宮は世間の嘲笑（二夫にまみえた）と複雑な人間関係（亡き夫柏木と夕霧の正妻雲居雁は兄妹。柏木と雲居雁の父太政大臣は、落葉の宮を恨む消息を送ってくる）に苦悩する。また、雲居雁もこれまで浮気ひとつしなかった夫の変貌に心を悩ませた。噂は六条院にも伝わり、源氏と紫上は心を痛める。

例①はこの時の紫上の思いである。英訳を挙げる。

W She pitied all women. How impossibly difficult was their position! If they shut themselves away, ignored the existence of beauty, tenderness — of all emotion — what was left, save to sit thinking of darkness and the grave? Nor was it, in the end, of the slightest satisfaction to the parents who bore one, that one should grow up into an inexperienced nonentity; on the contrary, they were extremely disappointed. Was there not a story about the Silent Prince? That was the kind of life women were expected to lead. They must lock everything up in their hearts. But even the clergy regarded silence as one of the hardest penances; and it was only by consenting to speak at last that the Silence Prince, despite all his 'knowledge of good and evil,' managed to avoid being buried alive. And even of one could settle, to one's own satisfaction, on a correct middle course, the difficulties of pursuing it were immense.... It was not of herself, of course, that she was thinking, but of her adopted child, the Akashi Princess.

S Such a difficult, constricted life as a woman as required to live! Moving things, amusing things, she must pretend to be unaffected by them. With whom was she to share the pleasure and beguile the tedium of this fleeting world? Since it chose to look upon women as useless, unfeeling creatures, should it not pity the fathers who went to such trouble rear-

ing them? Like the mute prince who was always appearing in sad parables, a woman should be sensitive but silent. The balance was certainly very difficult to maintain — and the little girl in her care, Genji's granddaughter, must face the same difficulties.

一体に紫上は「おいらか」な性質であり、怒りにも似た「心」のさまが描かれるのは、その生涯を通してここだけである。紫上は二人の女性を、また自分の生涯を思わずにはいられない。悲痛な物思いを幾度となく繰り返したが、結局自分の心を表現することなく、「家庭の天使」として謙虚に生きた人生が悔やまれてしまう。しかし紫上に残された時間はあまりない。「今はただ」、養育する女一の宮が充実した人生を送ってほしいと望むのである。

ウェイリー訳では、'That was...' 以下の文章に注目したい。「あれ（無言太子の話）が女性に期待されている生き方なのだ。女はすべてのことを心ひとつにおさめておかなくてはならない。聖職者たちでさえ、沈黙は最も苛酷な苦行のひとつと考えているのに。それに無言太子が生きながら葬られるのをなんとか逃れられたのは、物事の善悪を知り尽くしていたにもかかわらず、そうした知識のおかげではなく、口をきくことに最後に同意したからなのに」とある。原文にはない聖職者の意見や無言太子の詳細な逸話によって沈黙の難しさと不毛が強調され、「口をきくこと」即ち、表現することの重みをウェイリー訳の Murasaki が痛切に感じていることを伝えている。これまで受け身の姿勢で物思いを続けてきたウェイリー訳の Murasaki が、いつになく激しい怒りを見せる。それは今までの自分への怒りであり、女性の表現を許さない世界への怒りでもあろう。しかし時すでに遅し、ウェイリー訳の Murasaki にもうあまり時間は残されていなかった(14)。

サイデンステッカー訳では、'Like the mute...' 以下の意味を考えたい。「悲しい譬え話にいつも出てくるあの無言太子のように、女は感受性豊かでありつつも、沈黙すべきなのだ。そのバランスを保つのは実に難しい」とある。原文の「いふ

かひなき」の訳がなく、女性が口を閉ざして生きることを肯定している。原文とほぼ逆の意である。

感受性は磨かなくてはならない。しかし、それをひけらかしてはいけない。紫式部が清少納言について「人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣し」[15]などと酷評していることに相通ずるものがあるが、これはつまるところ、サイデンステッカー訳のMurasakiの自己肯定ではなかろうか。紫上は（原文でも両英訳でも）「すべてを見通していながら、語らぬことを選んだ無言太子のように、彼女も沈黙して受け身の姿勢を取り続け」[16]てきた。夕霧の事件を通して我が身を振り返ったサイデンステッカー訳のMurasakiは、そうした自分の生き方をやはり正しかったのだと判断するのである。

（四）

アイヴァン・モリスはウェイリー訳を"the freest possible type of translation"であり、"re-creation"に近いと述べている[17]。ウェイリー訳の自由奔放さは「桐壺」巻から既に明瞭だが、第二部に入るとその傾向はますます顕著になる。最大の例は出家した女三の宮が持仏開眼供養を営む「鈴虫」巻をまるごと省略してしまったことであろう。そうした原文離れが紫上の「心」の軌跡に及ぼす影響を探りたい。

「若菜上」巻冒頭から「若菜下」巻での紫上発病に至るおおよその内容を原文とウェイリー訳について並記してみる。

ウェイリー訳		原文	
'Wakana Part Ⅰ'	1 朱雀院の婿選びとその噂	「若菜上」	1 朱雀院の婿選びとその噂
	2 玉鬘による源氏四十賀		2 玉鬘による源氏四十賀
	3 女三の宮降嫁		3 女三の宮降嫁
			4 源氏と朧月夜の再会
	4 紫上、女三の宮と対面		5 紫上、女三の宮と対面
			6 紫上による源氏四十賀
			7 秋好中宮による源氏四十賀
			8 夕霧による源氏四十賀
	5 明石女御一の宮出産		9 明石女御一の宮出産
			10 明石の入道、入山
	6 六条院での蹴鞠		11 六条院での蹴鞠
	7 柏木の女三の宮懸想		12 柏木の女三の宮懸想
	8 柏木の女三の宮恋慕続く	「若菜下」	1 柏木の女三の宮恋慕続く
'Wakana Part Ⅱ'	1 冷泉帝譲位		2 冷泉帝譲位
	2 紫上出家を願う		3 紫上出家を願う
			4 六条院の住吉詣
			5 紫上出家を再び願う
			6 六条院での女楽
	3 源氏と紫上の会話		7 女楽の後、源氏と紫上の会話
	4 紫上発病		8 紫上発病

違いは二つある。まず巻の区切りの変更。原文では「若菜下」巻冒頭では、柏木の女三の宮恋慕が語られるが、内容は「若菜上」巻から連続している。また、原文の「若菜下」巻の1と2の間には四年間の空白の時間がある。この空白は、中国の史記にならい「年は返りぬ」と年代史的に記述していた第一部の手法を離れた紫式部の「小説家的成長」を示すともされる(18)が、ウェイリー訳はストーリーの転換点、御代の変わり目を巻の区切れとし、四年間の空白を語りの外へ押しやった。その結果、'Wakana Part I, II'巻の構成はすっきりとまとまりのよいものになっている。もうひとつは公の行事の大幅な省略である。上下巻に及ぶ長大な「若菜」巻は、源氏と紫上と女三の宮との関係に終始しているわけではない。巻のほぼ半分は源氏の四十賀を始めとする一連の行事の記述に費やされている。ウェイリー訳はそうした行事を大幅にカットした。

こうした改変の結果、ウェイリー訳の'Wakana'両巻は紫上の物思いを主として語ることになった。物語進行上、不可欠な明石の女御の一の宮出産と柏木の女三の宮思慕を除けば、ストーリーはほぼ紫上にまつわる内容に限定されている。ウェイリー訳の読者は、専ら紫上の「心」にのみつきあうわけである。

ウェイリー訳はさらにその「心」そのものをも大きく変貌させる。これまで見てきたように、多彩な変改の施されたウェイリー訳は、Murasakiの心の微細な襞に至るまでを描き出そうとしているかのようである。紫上の心のみが描かれる世界は、心理小説を読む感すらあるが、そこには他律的に生きたがゆえに、自らを懊悩の迷路に追い込んでいったMurasakiが、痛ましいほどの姿で浮かび上がってくる。

しかし、ウェイリー訳が切り捨てた箇所は紫上の孤独な心を暗示する役割も果たしていた。女三の宮降嫁という裏切りに加え、朧月夜とよりを戻すという裏切りを重ねる源氏の姿は、紫上がさらなる不信に至る境地を浮かび上がらせる。明石の入道の入山と住吉詣は、明石の御方を始めとする明石一族の栄華を描くことで、孤立無援の紫上を逆に際立たせる。

また源氏の四十賀をめぐる一連の行事は、源氏が私事では次々と衝激的な事件に遭遇するものの、公の地位は揺るぎないことを示しており、同じような裏切りに苦しみながら、そうした晴れやかな世界を持てない紫上を暗示する。原文は紫上の心を置き去りに進行する世界の中に、彼女の苦悩をくっきりと浮かび上がらせている。かつて「何心なく」世界と連続していた紫上の「心」の孤絶の憂いは、ウェイリー訳に見られる以上に深いのである。

「あまりにも華麗な」ウェイリー訳へのアンチ・テーゼとして作られたサイデンステッカー訳[19]は、原文の内容に概ね忠実である。また文体も、ウェイリー訳の長文中心の流麗な文章に対し、サイデンステッカー訳は短文中心の簡潔な文章が主流である。ウェイリー訳の流れるように華麗な文章は確かに、ひたすら思い詰めていくウェイリー訳のMurasakiの物思いを表現するのに適している。しかしサイデンステッカー訳の文章は、紫上の苦悩を描くには、時としてやや切れがよすぎるきらいがある。

サイデンステッカーは原作に忠実であることをモットーとしながらも、反復使用される語句（「らうたし」など）や、無意味語と思われる語句（「われながら」など）を始めとする原文の語句を、時として省略せざるえなかったと述べている[20]が、紫上の心理描写の場合もそうした省略が散見される。女三の宮降嫁の直後の文章を挙げる。

例⑬　たいのうへもことにふれて、ただにもおぼされぬ世の有さまなり。（若菜上）

S　It was unsettling time for Murasaki.

例⑭　三日が程は、夜がれなくわたり給ふを、としごろさもならひ給はぬここちに、忍ぶなれど猶もの哀なり。（若菜上）

S　For the first three nights he was faithfully in attendance upon her. Murasaki was unhappy but said nothing.

例⑬では「ことにふれて、ただにもおぼされぬ世の有さま」が unsettling 一語に集約され、例⑭では「としごろさもならひ給はぬここちに」がすっぽりと抜け落ちている。例⑬は、女三の宮降嫁の最初の三日間、紫上が何につけても冷静ではいられないというくだりである。降嫁決定の直後から紫上は継母を始めとする世間の思惑や、我が身のあやうさを嘆いていたが、実際に婚儀をまのあたりにして、さらに一層物思いを深くするのであり、見るもの、聞くものすべて物思いの種となる紫上の心境は、unsettling 一語で担うにはやや重いように思われる。また例⑭は、独り寝が続くことの絶えてなかった紫上にとって、しきたりに従い、源氏が三日続けて女三の宮のもとに通うことは、堪え難い苦痛であり、「としごろ…」という一節は、紫上の心理を理解するのに不可欠である。この部分を省略したサイデンステッカー訳から、紫上の心情の切実さが失われてしまったことは否めない。

また省略はされないものの、心情表現が別の位相に置換される場合もある。

例⑮　風うち吹きたる夜のけはひひややかにて、ふともねいられ給はぬを、ちかくさぶらふ人人あやしとやきかんと、うちもみじろぎ給はぬも、猶いとくるしげなり。（若菜上）

W　The wind was cold. Not wanting her women to know that she could not sleep, she lay motionless until she ached from the effort.

例⑪に続く箇所である。源氏の須磨蟄居の時代を思い出し、気を取り直すものの、慣れぬ独り寝に紫上はやはり眠れない。注目したいのは、二つ目の文である。「女房たちに眠れないのを知られたくなかったので」とは原文には書かれていないが、そう解釈すべき箇所であり誤訳ではない。しかし原文の「ちかくさぶらふ人人あやしとやきかんと、うちもみじろぎ給はぬも」という文は、「しまった！今、寝返りを打った音が女房たちに聞こえなかったかしら」と、衾の下で思わず身を固くする紫上の姿を鮮明に喚起する。「ちかくさぶらふ人人あやしとやきかん」とは、紫上の「心」の声そのものであ

り、迫真性をもって我々に訴えかけてくる。サイデンステッカー訳はこれを客観描写の地の文に移行させた結果、紫上の「心」のリアリティが著しく損なわれてしまった。

紫上の「心」を語る場合、心情表現の省略、地の文への移行などが施されたサイデンステッカー訳の文章では十分意を尽くせない、意は尽くせてもリアリティを持ちえない場合がある。あくまで簡潔な文章からは、紫上の「心」がいまひとつ明瞭に立ち上がってこないのである。そしてそれは、サイデンステッカー訳のMurasakiの自信と余裕を際立たせることでもあった。自らの生き方を肯定するMurasakiの悩みがリアリティに欠けるのは、ある意味で必然なのかもしれない。

（五）

「夕霧」巻の独白からほぼ一年後、「御法」巻の紫上は「わが御わたくしの殿」と思う二条院でその最期を迎えようとしていた。十歳の時、源氏に引き取られた紫上が二十七歳までを過ごした二条院は、彼女が「何心なく」遊んでいた昔の日々を知っている。女三の宮、秋好中宮、花散里、明石の御方と、女性たちのひしめく六条院は紫上の物思いの場でしかなかった。

「御法」巻の紫上からもう激しい心は聞かれない。春に法華経千部の供養を行うと、静かに残りの時を過ごす。そして秋風の吹く夕暮れ、紫上は源氏と明石女御に見とられて息を引き取る。

かつて「野分」巻での垣間見以来、紫上の美しさを忘れかねていた夕霧は、源氏と共にその死に顔に見入る。

例⑯　ひのいとあかきに、御色はいとしろくひかるやうにて、とかくうちまぎらはすことありしうつつの御もてなしよりも、いふかひなきさまに、なにごころなくてふしたまへる御ありさまの、あかぬ所なし…　（御法）

ここでの「なにこころもなくて」もまた、「若紫」巻から繰り返されてきた「何心なさ」と照応していよう。死をもって

凄絶な物思いから解き放たれた紫上は、「何心なき」世界へと回帰する、即ち、「心」の連続性を回復するのである。それはまた、自らの心のうちを自由に表現することのできる世界へと戻ることでもあった。紫上の「何心なき」死は物語にとって唯一の「救済」であったとする藤井貞和の説[21]は卓見であろう。一方、英訳は——

W in the strong lamplight her face shone with a dazzling whiteness. Never thought Genji, had her beauty seemed so flawless as now, when the eye could rest upon it undistracted by any ripple of sound or motion.

S In the bright lamplight the skin was a purer, more radiant white than the living lady, seated at her mirror, could have made it. Her beauty as if in untroubled sleep, emptied words like "peerless" of all content.

「なにこころなくて」をそれぞれ、"undistracted by any ripple of sound or motion"（ウェイリー訳）、"in untroubled sleep"（サイデンステッカー訳）としている。"sound"も"motion"も"trouble"もない世界。そこには「何心なさ」への回帰という形での救済はない。ただ静かな永遠の眠りがあるだけである。

懊悩の日々を送ったウェイリー訳のMurasakiも、自らの謙虚な人生を肯定したサインデッカー訳のMurasakiも、苦悩の果てにようやく平安を得るが、それは無言の世界であった。沈黙の苦悩から沈黙の平安へというベクトルで描かれる英訳のMurasakiの人生は、「何心なさ」への回帰という円環構造の中にある原文の紫上の人生よりも、荒寥とした感がある。

パレツキーやウルフら海外の読者が読むのは、このようなMurasakiの生涯である。女性が表現することの苦難を体現したような紫上の生涯の行き着く先には、『源氏物語』と*The Tale of Genji*とでは、それぞれに相異なるやすらぎの世界が広がっているのである。

註

(1) サラ・パレツキー「現代ミステリにおける女性の描かれ方」(講演内容の和訳　訳者不詳)『ミステリマガジン』早川書房　一九九五年二月号　一七一～一七五ページ。

(2) ヴァージニア・ウルフ「女性と小説」『ヴァージニア・ウルフ著作集7　評論』(朱牟田房子訳)　みすず書房　一九七六年　一九二ページ。

(3) 清水好子『源氏の女君』　塙新書　一九六七年　九九ページ。

(4) 「若紫」巻での初登場の場面における紫上像の両訳の差異については、拙稿「英語訳源氏物語――二人のMurasaki」(『近代の享受と海外の交流』　源氏物語講座9　勉誠社　一九九二年)を参照。

(5) 両訳とも、時に紫上をLittle Murasaki, little princess, young ladyなどと称することもあるが、必ずしも原文の呼称に対応しているわけではない。

(6) Norma Field, *The Splendor of longing in the Tale of Genji*, Princeton University Press　一九八七年　一九七ページ。

(7) 中山眞彦　『物語構造論』　岩波書店　一九九五年　二三七ページ。

(8) 第一部の最終巻、「藤裏葉」巻では紫上が「北の方」と呼ばれる箇所が二度あるが、これまで源氏の実質的な正妻として六条院に君臨してきた紫上は、女三の宮降嫁の今、「対の上」という相対的な地位に甘んじなくてはならなくなる(前述のように、英訳は呼称がほぼ統一されているため、この変化は訳出されない)。

(9) 阿部秋生、今井源衛、秋山虔　校注訳　日本古典文学全集『源氏物語　四』(小学館　一九七四年)六一ページの頭註

(10) 中田武司編　『岷江入楚　第三巻』　源氏物語古注集成第十三巻　桜楓社　一九八二年　三九二ページ。

(11) 森一郎　「源氏物語の心内語」　『物語文学を歩く』　有精堂　一九八九年　一三九ページ。

(12) 阿部秋生、今井源衛、秋山虔　前掲書、玉上琢彌『源氏物語評釈　第七巻』(角川書店　一九六六年)などの解釈。

(13) 田辺聖子　『源氏紙風船』　新潮社　一九八一年　一九七～一九八ページ。

(14) 紫上が心を砕く相手が、女一の宮から明石の女御へと変化している。ウェイリー訳では紫上が女一の宮を引き取る箇所(紫上が二度目に出家を願い出た直後)を削除したため、物語展開上の矛盾が生じないよう変更を加えたと推察できる。結果として

ウェイリー訳のMurasakiは、原文の紫上のように、源氏のいない夜のつれづれを女一の宮によって紛わすことができなくなる。

(15) 山本利達校注『紫式部日記、紫式部集』　新潮社古典文学集成　一九八〇年　九〇ページ。

(16) ハルオ・シラネ　鈴木登美、北村結花訳『夢の浮橋――源氏物語の詩学』　中央公論社　一九九二年　一七五ページ。

(17) Ivan Morris, *The World of Shining Prince*, Kodansha International　一九九四年　二八三ページ。

(18) 大野晋、丸谷才一　『光る源氏の物語』　中央公論社　一九九四年　九〇～九一ページ。

(19) E・G・サイデンステッカー　安西徹雄訳「名作の虚像と実像」『西洋の源氏　日本の源氏』　笠間書院　一九八四年　四四ページ。

(20) E・G・サイデンステッカー　安西徹雄訳「紫式部に忠実であるということ」　前掲書　六六～七八ページ。

(21) 藤井貞和　『源氏物語の始原と現在』　冬樹社　一九八〇年　一七二～一七三ページ。

原文の引用は『湖月抄』（北村季吟校注　講談社学術文庫　全三巻　一九八二年）による。また、英訳の引用は、ウェイリー訳は*The Tale of Genji*（Tuttle 2vols.　一九七〇年）、サイデンステッカー訳は*The Tale of Genji*（Tuttle 2vols.　一九七六年）による。またいずれも私に表記を改めた箇所がある。